

カール・ツツクマイヤーの短編小説『生と死を支配する者』

-ツツクマイヤーが切望する欧米諸国によるドイツ救済-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2021-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松澤, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21544

カール・ツックマイヤーの短編小説

『生と死を支配する者』

——ツックマイヤーが切望する欧米諸国によるドイツ救済——

Carl Zuckmayers Novelle „Herr über Leben und Tod”

——Zuckmayers Herzenswunsch nach Deutschland-Rettung von Europa und Amerika——

博士後期課程 独文学専攻 2017 年度入学

松 澤 智 子

MATSUZAWA Tomoko

【論文要旨】

ドイツの現状を世界に知ってもらふ最適なメディアが映画であることを熟知しているツックマイヤーは、当時の政治的意味を含んだ「安楽死」をテーマにした短編小説『生と死を支配する者』を映画の原作として執筆する。第一次世界大戦後の「ベルサイユ体制」を連想させる作品は、アメリカが提案した策により 1920 年代にドイツが黄金期を迎えた史実と結びつく。この黄金期を体験しているツックマイヤーは、ドイツの再生を実現するためには欧米諸国の力が必須であると考えたのではなかろうか。この作品の意図を読む解く手掛かりとして、社会的立場の弱い人々に向き合い他者を助けた人物「アッシジの聖フランチェスコ」に注目する。個人が他者を助ける気持ちも、国家が他国を助ける気持ちも本質的には同じであろう。悲惨な状況に置かれているドイツに対して、国家の利害を越えて人道的な行動を欧米諸国がしてくれたならば、ドイツは再生への道を進むとツックマイヤーは確信していたにちがいない。この短編小説が、欧米諸国にドイツを救済して欲しいという思いを込めて執筆された作品であることを本稿で明らかにする。

【キーワード】 カール・ツックマイヤー、アッシジの聖フランチェスコ、安楽死、ナチス、ベルサイユ体制

序章

カール・ツックマイヤーは、ナチスが政権を握ったドイツ国内で活動ができなくなり、1934年から1939年の間、ロンドンで映画脚本を多く手掛けた¹。ドイツ語圏で収入を得ることが難しい状況であった一方、ドイツ語圏以上に収入を得ることができる映画脚本に関心を寄せたことも確かである²。

ツックマイヤーがマックス・ラインハルトのドイツ劇場でドラマトゥルクをしていた頃（1923年）に知り合った女優エリーザベト・ベルクナー（Elisabeth Bergner, 1897-1986）は、映画『被告人は沈黙し続ける（*Der Angeklagte bleibt stumm*, 英語タイトル不明）』に出演するために1932年11月下旬にロンドンに渡った。この映画の監督はベルクナーの夫パウル・ツィンナー（Paul Czinner, 1890-1972）で、共同制作者がアレクサンダー・コルダ（Alexander Korda, 1893-1956）であったことから³、ツックマイヤーはベルクナーからコルダを紹介されたと考えられる。そしてツックマイヤーは、コルダに映画化を提案するために小説の執筆を始める。友人でもある出版者のゴットフリート・ベルマン・フィッシャー（Gottfried Bermann Fischer, 1897-1995）に「現在を舞台にした、とある夫婦の危機とそれを乗り越えた物語の構想が頭の中にある⁴」と、1938年4月28日手紙に綴っている。そして同年8月に完成した短編小説が『生と死を支配する者（*Herr über Leben und Tod*）』である。

ここで、短編『生と死を支配する者』のあらすじを見ておこう。

ロンドンで有名な心臓外科医の権威ノーバート・スタンホープ卿は、パリで傷を負ったブルターニュの田舎貴族ダタラン伯爵の命を救う。その娘リュシールは父親を助けたノーバートに感動し、ノーバートも娘の純粹さに引かれて結婚する。ノーバートはリュシールをロンドンの実家に連れて行くのであるが、息子を取られたと思う母親は嫁を他人扱いする。しばらくして子を授かったのであるが、その子は出産時の事故により障害を持って生まれてきた。その子が重荷に思え、考えた末にノーバートは、リュシールに障害のことを告げずに子どもを安楽死させようとする。だが、事実を知ったリュシールに妨げられ、世間の目に触れないようにフランス西海岸の港町サン・ケルク・シュル・メールにある女子修道院に子どもを預けることで落ち着いた。しかし、到着間もなくして子どもは死亡してしまう。死亡証明書作成のために、この地方の風土病を研究している青年医師で、病人を常にいたわり、宗教的な気持ちで医師という職業を遂行しているレイモン・デュケノア

¹ Horst Claus, *Zuckmayers Arbeiten für den Film in London 1934 bis 1939*. In: (Hrsg.) Gunther Nickel, *Zuckmayer-Jahrbuch*, Band 4-1., Sankt Ingbert: Röhrig Universitätsverlag, 2001, S. 341-411.

² (Hrsg.) Gunther Nickel und Ulrike Weiß, *Carl Zuckmayer 1896-1977 „Ich wollte nur Theater machen“* (Marbacher Katalog 49), Stuttgart: Deutsche Schillergesellschaft Marbach am Neckar, 1996, S. 247.

³ Claus, *Zuckmayers Arbeiten für den Film in London*, a. a. O., S. 344.

⁴ (Hrsg.) Irene Nawrocka, *Carl Zuckmayer/Gottfried Bermann Fischer Briefwechsel*. Band 1, Brieefe 1935-1977, Frankfurt am Main: S. Fischer, 2007, S. 13.

が修道院へ来た。ロンドンの冷たい霧田気の生活に悩んでいたリュシールは、若くて人間味あふれるレイモンに好意を抱き、二人は互いに愛し合うようになる。リュシールは、ロンドンに帰っても子どもの死を隠し、子どもを見舞うという口実でサン・ケルクに行き、もはや夫に向けることができない愛情をレイモンに向けるのであった。生き生きとした感情を得ることで魅力を増した妻を以前よりも独占しようとするノーバートは、再びサン・ケルクに行く支度をする妻に今回を最後にするよう希望した。それを承知したリュシールはレイモンとの心中を決め、薬品棚から毒薬の入ったガラスの瓶を持ち出す。レイモンは心中を拒否し、アメリカの研究所から招聘されていることを機に、二人でアメリカに逃げる計画を提案する。リュシールが同意すると二人は二日後の出航時間に港で落ち合う約束をし、レイモンは準備のため町に戻った。一方、毒薬が無くなっていることに気が付いたノーバートは、母親からリュシールが持ち出したことを聞き知る。口論の末、止める母親を振り切って、ノーバートはリュシールと子どもを連れ戻すためにサン・ケルクに向かう。出発前にノーバートは、世界医学会で知り合った小児科医の権威を訪ね、子どもに改善の可能性が残っていることを確認した。修道院に到着したノーバートは、我が子の墓を目にするのであった。リュシールを見つけれずにロンドンに帰る列車の中で、ノーバートは港に向かうレイモンと会う。互いの素性を知らずに乗り合わせた二人は、医者としての本質について議論を交わす。冷静で分析的なノーバートは、他人の苦しみを温かく宗教的にいたわるレイモンの考え方に説得されて、リュシールとの愛ある生活の復活を予期するのであった。レイモンが知り合いの子どもの治療をするために車両を移動した直後、列車事故が起こる。ノーバートが乗っている車両だけが無事で、レイモンは即死した。彼の上着のポケットからリュシールの名前が書かれた船券を見つけたノーバートは、すべてを察する。宿泊先のホテルで列車事故を耳にし、死体置き場へ向かったリュシールは、変わり果てたレイモンの姿を受け入れられず、待ち合わせの港へ向かう。そこに現れたのはノーバートであった。自分の考えが間違っていたことを悟ったノーバートは、絶望し虚脱状態の妻を抱きしめる。愛する者たちを失い、悲しみに満ちているリュシールは、傍にいるノーバートに再び愛情を向けるのであった⁵。

この作品に関する先行研究で注目されている点が二つある。一つは、この作品が安楽死を実行するための「中央執務機関 (Zentraldienststelle)」（通称「T4」) がナチスによって開設される前年にこのテーマを作品で扱ったこと⁶、もう一つは、主人公ノーバートが世界医学会で亡命してロンドンに在住しているロシア人の小児科医リュシコフ教授と会話する以下の場面である⁷。

「私としては、根絶に賛成です。—しかし残念ながらこの点に関して、我々の法律は、すでに

⁵ Carl Zuckmayer, *Meistererzählungen*, Frankfurt am Main: S. Fischer, 1960, S. 319–408.

⁶ (Hrsg.) Nickel/Weiß, *Carl Zuckmayer 1896–1977*, a. a. O., S. 254.
Hans Wagener, *Carl Zuckmayer*, München: C.H.Beck, 1983, S. 149.

⁷ Zuckmayer, *Meistererzählungen*, a. a. O., S. 359.

克服されている誤った人間性の偏見にまだ適合しています。」と（中略）ノーバートは言った。（中略）ロシア人の医者は、濃い眉毛の目からさげすんだような視線を彼に投げた。「人間性は、非常に軽々しく、あるいは好んで『誤った』という形容詞と結びつく概念ですね。人間性が生命の神秘に関わる限りでは一私が思うに、集団生活ではなく、特に個々の生命、この世の中で最もつまらない生命でも一人間性は決して完全に克服されてはならないでしょう。根絶は保存より容易いものです。」と彼（リュシコフ）は、自身の所見をじっくり考えているかのようにゆっくりと考え深げに言った。

ヴァーゲナーは、「亡命者であるツックマイヤーが自身の心情と体験を語っている⁸」と、この会話を解釈している。ニッケルとヴァイスも「ツックマイヤーの状況である⁹」と述べている。確かに反ナチスのツックマイヤーはドイツ国内での活動を禁止されており、ナチスがユダヤ人を弾圧する様子を見て、自分も拘束されるのではないかと不安な日々を送っていたであろう。だが、いずれの先行研究もこの会話を引用するのみで終わっている。ナチスが政権を得た1933年から自信がアメリカに亡命する1939年までの間、ツックマイヤーがナチスを欺くために作品に巧みに組み込んだメッセージを読み取るためには、会話の引用だけで終わらせてはならないのである。本稿は、ノーバートとレイモンの会話で話題に挙がる「アッシジの聖フランチェスコ」に注目した。この人物を通じて人間性を問い、欧米諸国がナチス政権下のドイツを救済する期待をツックマイヤーが抱いていたことを本稿で明らかにする。

第1章 安楽死と断種を執行するナチス

映画の原作として構想した小説のテーマは、当時の世界的な話題であり政治的意味も含んだ「安楽死」である¹⁰。映画を通じて、ヒトラーの人種理論下で「断種法」が成立しているドイツの現状を知ってもらう意図がツックマイヤーにはあったにちがいない。“Euthanasie”（安楽死）は、ギリシャ語の“Euthanasia”（“eu”「良好な」、 “thanatos”「死」）を語源としている。「苦痛に満ちた病気に苦しむ人を痛みなく死に至らせる行為」という意味であり、医学の用法でも思惑でもない¹¹。障碍者に「最終的医学援助」を提供する計画は、長きに渡って科学界と医学界が議論を積み重ねてきたことである。優生学、社会運動としての社会ダーウィニズム（社会進化論）において、この議論はドイツだけではなく欧米各国で行われていた。最終的医学援助は、チャールズ・ダーウィンの

⁸ Wagener, *Carl Zuckmayer*, a. a. O., S. 148–149.

⁹ (Hrsg.) Nickel/Weiß, *Carl Zuckmayer 1896–1977*, a. a. O., S. 254–255.

¹⁰ (Hrsg.) Irene Nawrocka, *Carl Zuckmayer/Gottfried Bermann Fischer Briefwechsel*, Band 2, Kommentar, Frankfurt am Main: S. Fischer, 2007, S. 20.

¹¹ ヒュー・グレゴリー・ギャラファー著、長瀬修訳『ナチスドイツと障害者「安楽死」計画』（現代書館、1996）、50–51頁 参照。

『自然淘汰による種の起源-生存競争における有利な種の保存』(1859) (以下『種の起源』) の出版以降に起きた生物学分野の活発な探求とその活動のきっかけになり、自然界の生物は神の被造物ではなく、生物学的進化の結果誕生したとされる¹²。この進化論でダーウィンは、「自然淘汰 (選別)」という重要な概念を提示した。自然環境の中で適応できなかった生物は滅び、適応力のある有能な生物だけが「生存競争」に勝ち抜いていく「適者存在」の法則が提示されたのであった。ダーウィンはこの法則を野生の動植物について論じたのだが、これを人間社会にも当てはめようとする考えが登場する¹³。1868年になると、動物学者エルンスト・ヘッケルが著書『自然創成史』で子どもたちを殺したスパルタ人を引き合いに出し、動植物の生存競争を民族史に転用していくのである¹⁴。

第一次世界大戦が終結してベルサイユ条約が承認された1920年に、カール・ビンディングとアルフレート・ホッヘが死の援助について論じた『価値無き生命抹殺の解除 (*Die Freigabe der Vernichtung lebensunwerten Lebens*)』が出版されたことで、障害者の安楽死論は注目されていく。この本は広く読まれ、その読者の一人がヒトラーであった。ヒトラーは『我が闘争』(1925)の執筆以前から優生学やダーウィニズムを読んでいて、出版当時、学者の著書だけでなくマスメディアでもよく取り上げられていたことで、障害を持つことは恥であるとの認識がドイツで広まり、障害者は生きるに値しないと見なされていた¹⁵。ライプチヒ大学の法学教授ビンディングは、ビスマルク政権下では法務長官の地位に就いていた。自然科学の発達で断種論や優生学の誕生を促したとは言え、法律行政の先頭に立ち、社会ダーウィニズムの影響を受けていたビンディングも、さすがに障害者の安楽死を法制化することは考えていなかった¹⁶。フライブルク大学教授のホッヘは、「厄介者」や「精神的死者」という概念を世間に提唱した。これらの考え方は死刑判決規準として用いられるようになったが、子どもの安楽死は認めていなかった¹⁷。ビンディングとホッヘの共著は、法学や精神医学の専門分野では反響がなかったのであるが、ナチス政権にとっては重大な学問的根拠を示す一冊になったのである¹⁸。

『生と死を支配する者』の主人公ノーバートは、彼の手にかかれば助からない患者も助かると言われる権威ある心臓外科医として注目されている。だが、自分の子どもが治る見込みがなく、余命数か月の障碍児でありことがわかると躊躇せずに安楽死させることを選ぶ。根絶に賛成であること

¹² 同上, 69頁 参照。

¹³ 小侯和一郎著『ナチス もう一つの大罪—「安楽死」とドイツ精神医学—』(人文書院, 1995), 16頁 参照。

¹⁴ エルンスト・クレー著, 松下正明監訳『第三帝国と安楽死 生きるに値しない生命の抹殺』(批評社, 1999), 10-11頁 参照。

¹⁵ ギャラファー (現代書館, 1996), 89頁 参照。

¹⁶ 小侯 (人文書院, 1995), 31頁 参照。

¹⁷ クレー (批評社, 1999), 23頁 参照。

ホッヘは親戚が安楽死の犠牲になると、一変して患者抹殺に反対の意を抱くようになる。小侯 (人文書院, 1995), 34頁 参照。

¹⁸ 同上。

を断言するノーバートの姿は、1933年にドイツで合法となった「遺伝病子孫予防法（通称「断種法」）」を示唆しているのではなかろうか。断種は、1920年代に入ってから人類衛生学者たちの大きなテーマになる。第一次世界大戦までは、遺伝病の人や他人に害を及ぼす一部の過激な人々に対して要求されるにすぎなかった¹⁹。安楽死が「生きるに値しないとされる者」を直ぐ抹殺するのに対して、断種は「将来において生きるに値しなくなる生命」を抹殺することである。価値の低い者を除去しようという目的は同じであるが、手段が異なった²⁰。ドイツの医者たちの議論を熟知しているヒトラーの抱く安楽死と断種に関する思想は、当時の科学理論や社会理論から自然と導かれていたことによって、医師たちが奇形や精神異常のドイツ国民を絶滅させる計画を提案した際に、ヒトラーは諸手を挙げて同意するのである²¹。

遺伝子に欠陥がある場合の選択的断種手術は、アメリカとヨーロッパの医学雑誌でも幅広く議論されていた。障害者に対して軽蔑の念しか持っていなかったヒトラーの見解は、当時受けいられていた優生学の教養を曲解した不正確なものであったにもかかわらず、1933年に全権委任法が成立するとヒトラーは無制限の権力を握り、7月14日に「断種法」を成立させた²²。その後、ナチスは障害者への社会の態度を著しく、かつ、深刻に変えていくのであった。安楽死や断種はヒトラー承認の下で実行された。しかし、考え出したのは医者であり、実行するのも医者である。ナチス党員の医者も多かったが、大多数がナチス党員ではなかった。慢性患者へのフラストレーションを抱いていた一部のドイツ人医師がこの法に賛同していたのだ。医療技術の進歩や遺伝科学の研究を進めるのではなく、患者自身を抹殺する行為におよんだのである。計画を強力に支持した有力な参加者は、ドイツの指導的立場にあり国際的にも定評のある医学界の権威であったが、社会進化論の原理と議論され始めた優生学、遺伝学、生理学を論理的に応用したに過ぎなかった²³。

障害児の安楽死は、成人の安楽死に先駆けて始まった。新生児を含む三歳未満の障害児の届け出は、おもに出産を介助した助産婦や産科医たちによってそのつど提出するように定められていたが、自宅や小規模な産院で出産することが多く、生後長期にわたって観察されることは無かった²⁴。小説においても、障害児の我が子を隠すため、フランスの片田舎にある修道院に預ける。主人公を断種に賛成する国際的に権威ある医者に障害児が生まれることで、安楽死と断種を公然と行

¹⁹ クレー（批評社、1999）、14頁 参照。

²⁰ 同上、28頁 参照。

²¹ ギャラファー（現代書館、1996）、45-46頁 参照。

²² 同上、42-43頁 参照。

1933年7月14日から第二次世界大戦開戦の1939年9月1日まで、ナチスが37万5千人の断種を報告している。他国でも同様の法があったが、ナチスほど熱心を実施した例はない。

重症アルコール症者、先天性の盲人および聾啞者、重症の奇形児、小人症などが断種処置の対象とされた。重要な点は、これらの患者に対する断種が必ずしも本人やその家族の同意を必要とせず、基本的に「強制断種」を意味していたのである。小俣（人文書院、1995）、39頁 参照。

²³ ギャラファー（現代書館、1996）、11頁 参照。

²⁴ 小俣（人文書院、1995）、137頁 参照。

うドイツの医療状況を作品で表現したのであろう。それに対し、できる限り子どもの世話をすべきだと安楽死を拒み続けるノーバートの妻リュシールに、躊躇せずに安楽死させる行為に抵抗する患者とその家族の敢な姿を反映したのではなかろうか。

第2章 ガラスの小瓶とパッシフローラ

作品には、「死」を連想させる場面にガラスの小瓶、「生・愛情・救済」を連想させる場面にパッシフローラ（和名：トケイソウ）が出てくる。これらを通じて、ツックマイヤーは何を訴えようとしたのであろうか。まずはガラスの小瓶から解明していく。

毒薬が入ったガラスの小瓶が書斎の薬品棚から無くなっていることにノーバートは気づき、大惨事になることを恐れ動揺する。母親からリュシールが持ち出すのを見たことを聞いたノーバートは、母親を「人殺し」と言って攻め、妻と子どもを助けるためにサン・ケルクに向かう。一方、冷めきっている夫婦仲を回復することもレイモンと別れることもできないリュシールは、持ってきた小瓶をレイモンに渡し心中を促す。小瓶の中身を確認したレイモンは、その瓶を海に投げ捨て「死」を拒絶するのであった。しかし、リュシールと待ち合わせをした港に向かう列車で、レイモンは薬の入った小瓶を持って具合の悪い子どもを診察するために別の車両に向かうと、その直後に列車が脱線し、レイモンは即死する。ツックマイヤーは、ガラスの小瓶によってレイモンの死が導かれたかのように描いているのであるが、そこに、ナチスと亡命者の関係を表したのではなかろうか。ドイツを追われた者たちは、僻地に隠れたとしてもナチスからは逃れられない、捕まって殺されるのではないかという恐怖を抱いている。それはツックマイヤー自身の心境と重なっていたにちがいない。レイモンはリュシールから受け取った小瓶を投げ捨て、死ではなく逃避行することを選んだ。これは、ナチスの追跡から逃れることを表現しているのであろう。しかし、レイモンは別の小瓶を手にとると、列車事故で死に至る。ナチスの追跡は終わることなく次から次へと迫り、気を休めてなどいられないことを、ガラスの小瓶を介して表現したのではなかろうか。また、レイモンの招聘先にアメリカを挙げることで、より遠くの安全な場所を求めている心境と、そこへは簡単に行き着くことはできない、安らぐ場所などどこにもない現実を描いたのではないだろうか。

恐怖に対する一方で、苦悩から救済される象徴としてパッシフローラが描かれている。最初にこの花が出てくるのは、リュシールとレイモンが出会った時である。子どもの死亡証明書を作成した後、「ここでは一人ぼっちなので、あなたがここにいてくれたら嬉しいのだけど²⁵」とリュシールは言う。孤独を感じた時、人は誰かに寄り添ってもらいたい。そんな彼女の苦悩を察したレイモンは、葬式が済むまで一緒にいる約束をした。修道院近くの海岸を歩いていると、砂に埋もれている廃屋を見つける。「パッシフローラ」と書かれたその家は、屋根までパッシフローラの蔓が伸び広がっていた。子どもを亡くしロンドンに居場所がないリュシールはその廃屋を借り受け、そこでレ

²⁵ Zuckmayer, *Meistererzählungen*, a. a. O., S. 350.

イモンと会うようになる。リュシールにとってレイモンが心の拠り所になるように、レイモンにとってもリュシールが活動の源になっていく。ノーバートがパッシフローラを見るのは、妻子をロンドンに連れ戻すために修道院を訪ねた時である。生きていると思っていた子どもが既に死んでおり、その墓にパッシフローラが献花されていたのであった。修道院を後にしたノーバートは、偶然入った居酒屋の主人からリュシールらしき女性が近くに別荘を借りていることを聞き、それを見つめる。生い茂っているパッシフローラを目にしたノーバートは、リュシールに起きた全てを知り、自分がリュシールについて何も知らなかったことに気付く。すると、助けたいという想いが芽生えてきたのである。

ノーバートに心境の変化をもたらしたパッシフローラは、南米原産の蔓性植物である。16世紀に南米に渡ってこの花を見たイエズス会士らは、かつてアッシジの聖フランチェスコ（以下フランチェスコ）が夢に見たと伝えられている十字架上の花であると信じ、「受難の花」と名付けた。彼らはこの花を原住民が改宗を待ち望んでいた印と信じて熱意をもって布教したのであった²⁶。フランチェスコは1182年にアッシジの裕福な商人の家庭に生まれ、後に社会から隔離されて見放された人びとに寄り添った人物である。アッシジには、ハンセン病者のための施療院が二つあった。当時、ハンセン病は罪を犯した者か、罪の行為から生まれた者が神の罰として病にかかると考えられていたため、健常者は彼らを避けていた。同様に、フランチェスコも彼らに近づかないようにしていた²⁷。ある日、アッシジ近郊を馬で走っていたフランチェスコは、一人のハンセン病者に会うと彼に金を与え、その手に接吻し抱擁した。その後、施療院に足を運ぶようになる²⁸。

レイモンは片田舎の漁村で伝染病の撲滅に尽力していた。レイモンが村人たちから慕われていた様子は、彼が村を立つ際に村の楽団が演奏し、歓声と共に見送られる描写でわかる。努力と献身に満ちたレイモンの姿は、フランチェスコのそれと重なる。また、フランチェスコの説教には男性だけでなく女性も魅了された。心を打たれた貴族の娘キアーラは、フランチェスコに従うために密

²⁶ 『世界大百科事典』20巻（平凡社、1988）、248頁「時計草」参照。

トケイソウの葉は槍、5本の葯はキリストが受けた五つの傷、巻きひげは鞭、子房柱は十字架、三本の花柱は釘をそれぞれ象徴すると見たためである。花言葉：聖愛、篤信

²⁷ キアーラ・フルゴーニ著、三森のぞみ訳『アッシジのフランチェスコ ひとりの人間の生涯』（白水社、2005）、45頁参照。

フランチェスコはイタリア人であるが、「フランチェスコ」という名前である。父親が織物商のためにフランスに行っている間に生まれたため、帰郷した父親が「フランチェスコ」と呼び始めたとも、母親の出身地がフランスであつたらしく、その影響もあってそう名付けたとも言われている。また、成長したフランチェスコが、当時であれば必死にフランス語を学ばなければ読めない書物に熱中していたことから名付けられたとも考えられている。同上、21-22頁参照。

現在、ハンセン病は感染症の病気であることが明らかになっている。極めて伝染力が弱く、もはや不治の病ではない。しかし、中世の人々にとっては、この病は不治の病であり、神から受けた罰とみなされていた。フランチェスコが寄り添ったのは、社会から隔離されて見放された人びとであった。同上、264頁参照。

²⁸ 同上、46-47頁参照。

かに家を出て、彼と仲間の待つ教会へ向かうのであった²⁹。このキアーラの行動は、リュシールの姿に重ねることができるのではなかろうか。ヴァーゲナーは、二人の駆け落ちする姿がツックマイヤーの戯曲『ベルゲンのならず者』(1934)に似ていると述べている³⁰。だが、侯爵の娘であるリュシールと人里離れた漁村で医者として活動するレイモンが駆け落ちする描写は、ヴァーゲナーが指す戯曲ではなく、フランチェスコとキアーラをイメージして執筆したのではないかと考えられる。フランチェスコの名は、列車で出会ったノーバートとレイモンの会話で交わされている³¹。

レイモン：(前略) アッシジの聖フランチェスコのことを考えて下さい—太陽の歌を一あらゆる生物への献身、小さきものたち、貧しき者たち、下等なものたちへの献身—そして偉大で、完全な、幾千もの存在への献身。—これこそが—僕の考えること—医師の宗教です！

ノーバート：聖フランチェスコは、ハンセン病を治療することができましたか。癌を。梅毒を。

レイモン：彼はそれ以上のことができました。彼は人間を助けることができました、その苦悩に耐えさせることで。

ノーバート：人間の苦悩は、手助けや治療ができないほど、とても深いものです。人間の苦悩は孤独です。そして苦悩は、学者も聖者も入り込むことができない奥底へ伸びています(後略)。

会話が一区切りすると、レイモンは子どもを診察するために車両を出ていく。一人残ったノーバートは車窓を流れる風景を見ながら、孤独の中で悩み苦しんだリュシールのことを理解する。すると、ノーバート自身も死への憧れの念を抱き始める。「死への憧れ」を抱いた瞬間、これが心の奥底にある誰も踏み入ることができない感情であることにノーバートは気が付いたにちがいない。悲しみや悩みを分かち合う相手がいない苦しみと孤独を実感することで、ノーバートはリュシールの苦悩を理解し、彼女の行動の全てを許すことができた。だから、港でリュシールを見つけたノーバートは、「私はわかっている、お前の身に起きてしまっていることが。(中略)我々二人で—それに耐えていこうではないか³²」と言うことができたのである。その言葉を聞いたリュシールは、心の底から溢れ出る克服の力、愛情、そして人間性の偉大な力をノーバートから感じ取った。もう孤独ではないことを確信したリュシールは、ノーバートと一緒にロンドンへ帰るのであった。

ツックマイヤーがこのようにノーバートを変化させたことには、どのような意図があったのだろうか。それは、ドイツが変化する、つまりナチスの支配からドイツが救済されることを描いたにち

²⁹ 同上、137頁 参照。

³⁰ Wagener, *Carl Zuckmayer*, a. a. O., S. 148.

³¹ Zuckmayer, *Meistererzählungen*, a. a. O., S. 398. (会話部分のみ抜粋)

³² Zuckmayer, *Meistererzählungen*, a. a. O., S. 408.

がない。レイモンがノーバートにとってのフランチェスコであったように、ツックマイヤーはドイツにとってのフランチェスコが欧米諸国であると考えていたのではないだろうか。次の章でこの点を述べていく。

第3章 ナチス支配からドイツが脱却する可能性を欧米諸国に見出す

世界医学会議の後で催される祝賀会でノーバートとロシア人医師が会話を交わす場があることは先に述べたが、この会話にアメリカ人医師が割って入って来る。途中から現れるのは、1914年に始まった大戦に1917年から参戦したアメリカを想像させようとしたのではなかろうか。ツックマイヤーは第一次世界大戦後の「ベルサイユ体制」をこの世界医学会議に見立てたと推測できる。一次大戦後、国家間の勢力によって国際平和を保とうとした体制がベルサイユ体制であった。この体制は、ヨーロッパにおける覇権の実現を目指す戦勝国がドイツを極端に圧迫し、ロシアを無視した国際体制でもあった³³。戦勝国のイギリスとフランスが考えたドイツに対する実行不可能な賠償要求額の支払いは、ベルサイユ体制の最大の不安定要素となり、後にこのドイツの不满はナチスの台頭に繋がり、ベルサイユ体制を崩壊させてゆくのである³⁴。他方、アメリカのウィルソン大統領が掲げた「十四箇条の講和綱領」によって平和の理念が強調されていた。この講和綱領の下でドイツが終戦を決意したことによって、パリ講和条約会議はアメリカの優位な立場で進められていく³⁵。ウィルソン大統領が1924年にアメリカの財政問題の専門家ドーズ（Charles Gates Dawes, 185-1951）を委員長とする特別委員会を立ち上げると、ドーズはドイツの賠償総額を棚上げし、さしあたり5年間にドイツが支払う額を決定するという案を打ち出す。その案が承認されると、アメリカ資本が大量にドイツに流れ込み、その結果1920年代のドイツに黄金期がもたらされるのであった³⁶。ツックマイヤーはまさにこの恩恵の下で活躍し、人気作家の地位を得たのである。この体験は、作品の執筆に大きく影響しているのではなかろうか。再びドイツが繁栄し、ツックマイヤー自身もドイツの文壇に戻る願いがあったにちがいない。ナチスからドイツを救い出してもらいたいが、他国は動いてくれない。作品中、毒薬が入ったガラスの瓶をリュシールが持ち出すのを見て見ぬ振りをした母親に向かってノーバートが、「それは人殺しです³⁷」、「それは—犯罪です³⁸」と言ったのは、隣国に向けての言葉であったと推測できる。この言葉をあえて用いることで、見て見ぬ振りをすることの無情を他国に気付かせようとする意図があったのかもしれない。

ツックマイヤーは恋愛を前面に出した作品を完成させたのであるが、実際にはナチス政権下のド

³³ 『世界大百科事典』25巻、604-607頁「ベルサイユ体制」参照。

³⁴ 同上、25巻、607頁「ベルサイユ体制の特質と崩壊」参照。

³⁵ 同上、16巻、520-521頁「第1次世界大戦 戦争の終結」参照。

³⁶ 同上、25巻、607頁「ベルサイユ体制の特質と崩壊」参照。

³⁷ Zuckmayer, *Meistererzählungen*, a. a. O., S. 358.

³⁸ Ebd..

イツの現状を組み込んだ作品であると言えるのではなかろうか。小説が映画化されて欧米諸国で上映されていたならば、ドイツに関心が向けられてナチスの勢力が弱められる、あわよくばナチスを消滅させられるとツックマイヤーは思い描いていたのではないだろうか。だが、コルダが作品の映画化を拒んだために、これらを実現する機会は失われてしまった。

第4章 『生と死を支配する者』の映画化

ツックマイヤーは1938年6月14日付でベルマン・フィッシャーに宛てた手紙に、「短編小説の執筆は、驚くほどの速さで順調に進んでいる。三週間後には完成することができる。(中略)この作品を映画に仕上げたとしても、彼(コルダ)は気に入ってくれるだろう³⁹⁾と綴り、およそ一週間後の6月23日に再び手紙を送る⁴⁰⁾。

私の小説『生と死を支配する者』は、10月初旬ではなく、きっと二週間後、遅くとも三週間後、つまり7月中旬に完成するだろう。あなたも知っての通り、私はこの小説をコルダに(中略)渡す必要がある。彼は受け取ってくれるかだろうか…。もし受け取らなかったら、彼は愚か者だ。(中略)残念な結果になったとしても、既に私には他の良い可能性が見えている。短編小説、つまり書籍として、この作品は私が書いた恋愛小説で間違いなく一番良いものになる。

8月上旬、コルダが「大衆向けではない」として作品の映画化を拒否する。映画制作による報酬を得ることができなくなったツックマイヤーは、ベルマン・フィッシャー社から10月中旬に小説を出版することで、幾らかの亡命資金を得るのであった⁴¹⁾。翌年6月、アメリカに亡命したツックマイヤーはハリウッドで映画脚本の仕事を得るが、そこでの制作システムに馴染めず、ニューヨークにある亡命者のための演劇学校で講師として働き始める。英語が苦手なツックマイヤーは、そこでの仕事も続けられなかった。極貧寸前、友人のフリッツ・コルトナー(Fritz Kortner, 1892-1970)から舞台作品の仕事に誘われたが、その仕事も上手くいかなかった⁴²⁾。ツックマイヤーとコルトナーは『生と死を支配する者』を映画化に向けて書き直していたが、結局、映画化には至らなかった

³⁹⁾ (Hrsg.) Nawrocka, *Zuckmayer/Bermann Fischer Briefwechsel*, Bd. 1., a. a. O., S. 47.

⁴⁰⁾ Ebd., S. 53.

⁴¹⁾ Claus, *Zuckmayers Arbeiten für den Film in London*, a. a. O., S. 399.

豪華な撮影セットで撮影したツックマイヤー脚本の映画『レンブラント』(1936)の失敗もコルダが拒む理由だったのかもしれない。舞台向きの独白の場面などは評論家からは称賛されたが、観客には評判が良くなかった。制作費の一部しか回収できなかったコルダは、映画制作から長らく退くことになった。(Hrsg.) Nickel/Weiß, *Carl Zuckmayer 1896-1977*, a. a. O., S. 255.

1938年にストックホルムで出版されて以来、1976年までに約30万部発行されている。カール・ツックマイヤー著、毛利孝一訳『生と死の支配者』(金剛出版, 1980), 213頁 参照。

た⁴³。

1946年、ハリウッドで代理人をしているパウル・コーナー（Paul Kohner, 1902-1988）から、ツックマイヤーとコルトナーが改訂した小説の英訳版を販売する話を聞くと⁴⁴、ツックマイヤーはコルトナーに手紙（1946年5月2日付）を宛てた⁴⁵。

当時（1940年）、我々は作品の数か所を骨折って削除し、想定した買い手が一番気に入るように書き替えた。（中略）もう六年も前に白紙になった昔のくだらない話を再び復活させることを、あなたは予想しなかっただろう。

5月3日にコーナーは、映画脚本として1940年に書かれた小説をメキシコで販売し、ツックマイヤーは5月29日にインターナショナル・ピクチャー・カンパニーと映画権利の契約を結ぶことができたが、映画化には至らなかった⁴⁶。1954年、『生と死を支配する者』はヴィクトル・ヴィカス（Victor Vicas, 1918-1985）の監督、ヴィカスとフレデリック・グレンデル（Frédéric Grendel, 1924-2001）の脚本によって、ようやく映画化された⁴⁷。そしてこの映画が、『青い潮』の邦題で1957年7月29日から新宿、渋谷、丸の内などで上映されたのである⁴⁸。日本での上映を機に、

⁴² Carl Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir. Horen der Freundschaft*, Frankfurt am Main: S. Fischer, 1996, S. 572-577.

Wagener, *Carl Zuckmayer*, a.a.O., S. 33-35.

演劇学校の責任者であったエルヴィン・ピスカトル（Erwin Piscator, 1893-1966）は、1920年代にベルリンのフライエ・フォルクスビューネの演出家として活躍していた。Thomas Ayck, *Carl Zuckmayer*, Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch, 1977, S. 53.

アメリカ人のマックスウェル・アンダーソンとローレンス・スターリングスの映画 *What price glory?* をツックマイヤーが改作した戯曲『リヴァーレン（*Rivalen*）』（1929）の演出をピスカトルが、主役をコルトナーが務めた。（Hrsg.）Barbara Glauert, *Carl Zuckmayer Das Bühnenwerk im Spiegel der Kritik*, Frankfurt am Main: S. Fischer, 1977, S. 131.

ピスカトルの紹介で講師の職を得たツックマイヤーは、演技や衣装、舞台音楽、演劇論など演劇を構成する全ての部門を包括して教える演劇ワークショップと戯曲におけるユーモアについての演習を担当した。

⁴³ Klaus Völker, *Fritz Kortner. Schauspieler und Regisseur*. Berlin: Edition Hentrich, 1987, S.148. In: (Hrsg.) Nickel/Weiß, *Carl Zuckmayer 1896-1977*, a. a. O., S. 256.

映画脚本を書く機会も失い、ツックマイヤーはニューヨークを離れてバーモント州のバーナードで農場を経営しながら暮らし始めた。Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 580-586.

⁴⁴ (Hrsg.) Nawrocka, *Zuckmayer/Bermann Fischer Briefwechsel*, Bd. 1., a. a. O., S. 301.

コーナーは、1930年代半ば以降、ドイツから来る映画脚本家、映画演出家、映画俳優にとってアメリカにおいて重要な映画エージェンシーであった。

⁴⁵ Völker, *Fritz Kortner*, a. a. O., S. 256.

⁴⁶ (Hrsg.) Nawrocka, *Zuckmayer/Bermann Fischer Briefwechsel*, Bd. 2., a. a. O., S. 45, 72, 86.

⁴⁷ Ebd., S. 176.

⁴⁸ 読売新聞 広告欄（1957年7月25日、28日、9月5日 東京・夕刊）「読売新聞データベース ヨミダス歴史館」、URL: <https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>（参照日：2020年9月14日）

桜井正寅による短編小説の翻訳と、中村耕平によるシナリオ独和对訳が出版された⁴⁹。

原作がある作品を映画化する場合には、原作の筋立てや人物をそのまま登場させることが必ずしも作品の成功に繋がるわけではない。『生と死を支配する者』の場合、小説が発表されてから映画化までおよそ十六年経っており、その間に第三帝国は消滅し、第二次世界大戦は終結した。ニュルンベルク裁判が行われ、東西ドイツの対立が生じるなど、小説が発表された時期と映画化の時期の社会情勢が大きく変わっている。原作の意図するテーマを社会情勢に応じて、どのように現代化するのかという問題を避けることはできない。そこでヴィカスとグレンデルは小説を大胆に脚色し、時代を第二次世界大戦後に、イギリス人の主人公をドイツ人に、そして舞台をロンドンから西ドイツに変更した。小説は分析的に考える外科医のノーバートを中心人物として、夫婦の愛情が元に戻るまでの間に起こった三角関係と、ノーバートとレイモンの議論を通じて生と死の本質をきわめようとするのに対し、映画は妻の愛情に焦点を合わせ、冷めきった家庭から逃れて開放的な片田舎で知り合った若い医者との三角関係を中心的な筋立てとしている。原作が持つ哲学的・社会批判的な背景が弱まり、作品が単なるメロドラマになってしまったことは否めない。

終章

1980年、医師の毛利孝一氏によって翻訳された『生と死の支配者』が出版された。氏はあとがきに、良くも悪くも変わりばえしない容態を診て回る往診の意味を失った時に、友人が贈ってくれたこの小説を読んで感動したことを綴っている。また、患者の病状が良くならず、往診は医学的に無意義ではないかと悩んでいた氏の心に、ノーバートとレイモンが交わす会話が心に響いたとも記してある⁵⁰。そして「一見無意義な自分の往診も、人間がその苦しみに耐えていくのに力になってやることに少しは役立っているのではないか⁵¹」と思ひ直すことができたそうだ。医者という立場であったことで、深く感銘を受けたことは確かであろう。だが同時に、『生と死を支配する者』が時代や国そして宗教の区別なく、読者の心を引きつける作品であることも証明している。

個人が他者を想う気持ちも、国家が他国を想う気持ちも本質的には一緒なのではなかろうか。自分を守ること、家族を守ること、そして祖国を守ること、つまり、自分への愛、家族への愛、祖国への愛は、いずれも人間に備わった本能と言える感情なのではなかろうか。これこそツックマイヤーがノーバートに言わせた「人間性」を意味するのではないだろうか。貧しい者、弱い者、力の

⁴⁹ カール・ツックマイヤー原作、桜井正寅訳『青い潮』（南江堂、1957）、中村耕平訳註『青い潮』独和对訳シナリオシリーズ第5輯（南江堂、1957）

吉田六郎訳『生死を越えて』（角川書店、1957）も出版されているが、訳者あとがき等に作品映画化について述べていない。日本の上映に合わせて出版されたのか不明であるため、脚注での表記にとどめる。

⁵⁰ ツックマイヤー（金剛出版、1980）、215頁 参照。

⁵¹ 同上、216頁 参照。

毛利氏は、浄土真宗の家庭で育ち、キリスト教に触れる機会がなかったことから、ノーバートとレイモンの会話に感動したのだらうと述べている。

ない者、病をわずらっている他者をいたわる気持ちは一人ひとりの心にある。ツックマイヤーは人々に呼び掛けると同様に、欧米諸国にドイツの救済を訴えるための手段として、映画が最適であると考えたのであろう。かつて脚本に関わった『嘆きの天使 (*Der blaue Engel*)』(1929) が世界中で注目を集めた体験を持つツックマイヤーが、映画を活用しようとするのは不思議ではない。映画を通じて世界がドイツに注目し、国家の利害を越えて人道的な行動を起こしてくれていたならば、ナチスが実行する安楽死と断種を止めることができる。そして、ドイツがより良い方向に進むことをツックマイヤーは脳裏に描き、それを確信していたにちがいない。だが、コルダが作品の映画化を断ったことでツックマイヤーの望みは絶たれてしまった。そして第二次世界大戦が始まって間もなく、ヒトラーは不治の患者に対する殺害の全権をナチ党の帝国指導者の一人フィリップ・ブーラーと医学博士カール・ブラントに与え、その数か月後に「治癒不可能な患者には安楽死を施すことを許可する」という私信の委任状を出した⁵²。翌年、障害者たちが施設から強制的に連行され始められるのと同時に「帝国重度遺伝病科学研究委員会」が設立され、精神的廃疾児、重度障碍児、白痴的児童の死を援助する任務が遂行された⁵³。

ツックマイヤーは、人類の普遍のテーマを用いてナチスに支配されているドイツの現状を組み込んだ作品を通じて、ナチス政権下のドイツを救い出して欲しいと訴えた。そしてそれは、ツックマイヤー自身を救い出して欲しいという切なる願いでもあったのではなかろうか。しかしその期待は叶わず、ツックマイヤーは家族と共にアメリカへ亡命するのであった。

⁵² フランツ・ルツィウス著、山下公子訳『灰色のバスがやってきた』(草思社、1991)、45頁、269頁 参照。

⁵³ ギャラファー(現代書館、1996)、48-49頁 参照。

ルツィウス(草思社、1991)、45頁 参照。

【参考資料】 映画『生と死を支配する者』

〈原作と映画における主な登場人物の違い〉

原 作	映 画
ノーバート・スタインホープ卿 ロンドン大学教授、心臓外科の権威。ロンドンで母親と同居。	ゲオルク・ベルトラム教授 ベルリン大学教授、外科医。戦争中に妻と一子を失い、母親と共にベルリンに住む。
リュシール・ダタラン ブルターニュのダタラン伯爵令嬢	バルバラ・ハウゼン ヴェルナー・ハウゼンの娘
ダタラン伯爵 友人との決闘で負傷。ノーバートの手術により命が救われた。	ヴェルナー・ハウゼン 楽団指揮者。車の運転中に踏切の遮断機に気付かず事故を招く。偶然この列車に乗っていたゲオルクにより命が救われた。
レイモン・デュケノア フランス人の有望な青年医師。ブルターニュで風土病の研究中にリュシールと恋に落ちる。アメリカの研究所から招聘されたのを機に駆け落ちを計画するが、出航前日に列車事故で死亡。	ダニエル・カレンティス 第二次世界大戦中バルト海地方からフランスに亡命した医師。バルバラと恋に落ちるが、海水浴中に波にさらわれて死亡。

〈スタッフ〉

原作：カール・ツックマイヤー

監督：ヴィクトル・ヴィカス

脚色：フレデリック・グレンデル、ヴィクトル・ヴィカス

台本：ホルスト・ヘヒラー

音楽：ハンス-マルティン・マジェウスキー

撮影監督：ゲーラン・シュトリントベルク

美術：ハンス・レーダーシュテーター

〈キャスト〉

バルバラ・ベルトラム（旧姓ハウゼン）：マリア・シェル

ゲオルク・ベルトラム教授：ヴィルヘルム・ボルヒェルト

ダニエル・カレンティス医師：イヴェン・デニ

〈あらすじ〉

霧深いある夜、楽団指揮者のヴェルナー・ハウゼンとその娘バルバラは演奏予定地へ車を走らせていた。ラジオに聞き入り、遮断機に気付かずにいたために列車と激突したヴェルナーは重傷を負った。ヴェルナーの容態は危ぶまれたが、運よく列車に乗り合わせていた外科医ゲオルク・ベルトラムによって救われた。バルバラの感謝と尊敬の気持ちは愛に変わり、ゲオルクも純粋なバルバラに愛情を持ち、二人は結婚する。夫の医者という厳しく多忙な職業、年齢差、息子を溺愛する母親と

共に過ごすベルリンでの生活は、若いバルバラに淋しい結婚生活を強いる。しばらくして授かった子は、出産時の事故により障害を持って生まれた。妻を苦しませたくないと同時に、世間体を気にして絶対に子どもを家に置きたくないゲオルクは事実を隠し、子どもを安楽死させようとする。それに気付いたバルバラは、医師は人間の生死を決める権利があると断言する夫を攻め、子どもと共にかつてハウゼン家でメイドをしていたルイーザが経営するブルターニュ海辺の町サン・ゲノレにある小さな宿に身を隠した。

ルイーザが紹介した医者ダニエル・カレンティスは、子どもについて希望のある診断を下した。ゲオルクが医学を絶対視し、機械的に患者を処理していくのに対し、ダニエルは患者と同様に悩み、人間として患者を理解する。医者職務についてもゲオルクと異なる考えを持っているダニエルにバルバラは引き寄せられる。だが、ダニエルにも子どもは救えなかった。バルバラとゲオルクの結びつきは完全に断たれ、バルバラは夫と別れてダニエルと一緒にいる決心をする。しかしベルリンに帰ると、離れていた数か月の間にゲオルクの考え方が一変していた。子どもを殺そうとした自分の思い上がりを後悔し、理性だけでは律することができない人間の非合理性、真の愛情に目覚めていたのである。子どもと一緒に帰って来て欲しいと言うゲオルクの言葉を聞いたバルバラは、別れを告げる勇気を失った。バルバラは夫の元に戻ることに決め、理解と許しを得るためにダニエルを訪ねる。バルバラなしでは生きていけないと言ったダニエルは、翌朝、海へ泳ぎに行ったきり帰ってこなかった。

ゲオルクはバルバラを連れ戻すために、サン・ゲノレのルイーザの宿を訪ねる。そこで教えてもらったダニエルの家に行くと、ゲオルクは妻の荷物を目にし、全てを知った。田舎道を進む葬儀の列にバルバラの姿を見つけたゲオルクは、埋葬が終り安心して歩くバルバラを温かい腕と大きな愛情で抱擁するのであった。

[参考文献]

カール・ツクマイアー原作、桜井正寅訳『青い潮』（南江堂、1957）
中村耕平訳『青い潮』独和对訳シナリオシリーズ第5輯（南江堂 1957）、
『キネマ旬報』7月下旬号 No. 181（キネマ旬報社 1957）